

ニューテクノロジー振興財団 設立20周年 マイクロマウスと共に歩いた20年 記念座談会【中編】

この座談会はNTF財団設立20周年企画として、2006年11月に行なわれました。

その前編は11月の山形県長井市で開催された

全日本マイクロマウス大会にて配布された情報誌「MOUSE」の

創刊号復刻版の中に掲載されました。(現在HPにて掲載中)

ここからはその座談会の続きとしてご覧ください。



人を惹きつける競技とは

先川原—マイクロマウス競技の最盛期はいつ頃なんでしょう。

田 代—話題性という意味だけでは2～3回目の大会がピークでしょう。しかし、その後参加者が減ることもなく、逆に学校や企業にも裾野が広がってきました。その後、ロボット競技会があちこちに飛び火しましたが、これら競技の拡がりのきっかけづくりの役目は果たしたのかなと思っています。その功績というか、大真面目にギネスに申請しようか、なんて財団内部で盛り上がっているところです。

先川原—それはいい考えですね。ロボコンなんて言葉はNHKが勝手に作った言葉で、本当のロボットコンテストはそのずっと前からあったと私は色んなところで紹介しています。ところでここ数年間というのは、ゴールに到着するスピードはそんなに変わっていませんよね。

油 田—そろそろ技術的に出尽くした感があるのは確かです。

先川原—そこで今の迷路は16×16の升目を走っています

が、例えば32×32でやったらどうでしょうか。

油 田—それは物理的な会場探しの問題が大きいでしょうね。むしろこの際、18センチ幅の時代ではなくて9センチにしましょうと。9センチで32×32だよというのもありますね。つまり80年代の始めに18センチなんて言ったのを考えれば、難しい話ではないのかもしれませんが。

先川原—ひと角3センチでもいいですよ（笑）。今後の大会を左右するサイズが、今ここで決まれば面白いですが。（笑）

油 田—しかし実は、競技を面白くするのはサイズではない。参加者だけでなく、世の中の人には16×16を32×32にするだけでは目新しさはなくて、もっと質的な違いが必要だという気がして。それで良い知恵が浮かばないんですね。例えばロボカップは2050年に人間相手に競技するというような事を言う。それはもちろん荒唐無稽な話だけど、言ったおかげで荒唐無稽をどうしたら荒唐無稽でなくすることができるかということを考えなくてはならない。例えば、仮にマウス競技では金属を使うのは禁止する、シリコンを使うのも禁止する、たんぱく質とカルシウム以外は使っちゃいけないとします。しかし、そのための段階的なステップにブレイクダウンできないから感単には言えない現実もあるんですよ。

先川原—田代さんがさっきから新しい競技の話になった時から、とたんに悩んでいます。

田 代—いや、実際に現実的に二十年以上も悩んできたことですからね。（笑）

先川原—そうですね。そこでちょっと気になることがあるんですが、これだけ四半世紀に渡る運営を続けてきて、社内外含めてさまざまな声があると思うんですよ。これ以上どうなるのとか、参加者側からの声もあるだろうし、またはもう止めたらという声もあると思うんです。それに対してはどんな対応をされているのですか。

田 代—マウスがここ四半世紀の歴史の中でたくさんの人を技術屋への道に歩ませるきっかけにはなった





という歴史的な重みは感じています。それはもちろん企業の活動だけじゃない、社会的な事業の重みというのはこういうところにあるんだなと。だからこそ、中途半端なことで変えられないし、止められない。そう言いつつ思い切ってチャレンジもしたい。しかし現実的には年に1回の大会の開催で根を上げていて、来年どうしようかなって毎年悩んでいる(笑)。ワクワクする夢は私の中にもあるけれど、幾つかの要素を満たさなければならない。新しい技術テーマというのは技術課題が明確である事、それからこの競技会でずっとこだわりの続けた『良い技術がより評価されるようなルールでなければならない』という事。

先川原一運の要素が少ないということですかね。

田代一運の要素というのは、あればあるほどイベント的には面白いのです。いわゆる対戦型しかり、ルールの問題によって、技術以外の要因で勝敗が決まるのは技術競技としては少し問題があるのではないかと思います。運の良さで勝てるのではなく、良い技術・完成度の高いものを作った方の成績が良くなってはならない。という方向でこの競技のあり方のようなものを考えてはいるものの、見て面白いとか、話題になるとかいうことは片方で維持していくには重要な要素だったりする。作る側からすればこんなに大変だったと言うけれども、16×16か32×32かなんて見る側からすれば関係ない事ですから。

先川原一見る側にとってはあまり興味が無いってことですね。

田代一今年は32×32になりましたとニュースリリース出しても、誰が驚いてくれますか。えーッ、そんなことができるようになったのか、という話題でなければ、技術屋だけでなく、世の中全体を引っ掻き回すインパクトはありません。そういうインパクトのある話題性を持っていないと中々変えられない。

先川原一油田先生は大学の中のロボコンで、3年に一回とかルールを変えながらチャレンジさせておられますが、あれは教育的な効果を高めるためのものなのですか。

油 田—僕はやる気を起こさせるにはどうしたらいいか、動機付け、ただそれがあるだけです。NHKロボコンをイベントとして見たとき、これは去年と同じだと思われる訳には行かないので競技を変えざるをえない。いかにも進歩しているかの如きルールを作っていかななくてはならない一方、参加者側にとって自分自身の技術チャレンジとして狙っていたのに今年は違う競技になってしまった、というのも問題がある。このマイクロマウスのすごいところは、何年間も続けている人が一杯いるじゃないですか。

先川原—そこがまた不思議ですよ、何が理由なのでしょう。

麦 田—走る事がとても難しいんです。最初は迷路をまともに走ることができなくて、次にスラロームをするまでに何年もかかって、という風に時間をかけて作って行く内へのめり込んでしまう。

油 田—それでいて、競技はむしろシンプルであるしね。

麦 田—シンプルで難しい、それでいつまでも奥の深いテーマを持っている。これが魅力になっているんでしょうね。



後編に続く
(taidan_03.pdf)

New Technology Foundation The 20th Anniversary